

狭山の元気 発見



子ども達もボランティアで手作りコンサートに参加
ピアノを奏で、しっとりと歌い上げる木下航志さんの世界



30名を超えるボランティアが一つになって、ライブを成功させました



収益金を寄附にして渡す菅原さん

子育て中の主婦たちが大きなチャレンジ 盲目のミュージシャン・木下航志さんの歌声を 多くの人たちに聴いてほしい

「純粋な魂を揺さぶる歌声を多くの方に聴いてもらいたい」
「ごく普通の主婦たちが、一人の若きミュージシャンの虜(こゝろ)になり、その音楽から与えられる感動、喜び、

勇気を多くの人たちと分かち合いたいと一念発起して誕生したのが、木下航志ライブインさやま実行委員会でした。
代表として奔走された菅原実千代さんは、10年前に、若干11歳の盲目の男の子が、力強く歌つ姿をテレビで見感動したと言います。それが木下航志さんでした。鹿児島県出身の彼は、幼いころに視力を失いながらもピアノに親しみ、その音楽の才能が認められ、今年の8月、米ニューヨーク国連本部での国連青少年会議に、日本人で初めて演奏家として招かれるなど、ハンデを持ちながらも人の心を深く動かす音楽家として国内外から注目を集めています。

昨年6月に初めて木下さんのライブを聞いた菅原さんは、「彼の歌は本当に驚きの連続で、まさに神の声のよう。私たちにたくさん元気を与えてくれる木下さんを、どうしても狭山に呼びたいと思いついた」と、その動機を語ります。
その後、呼びかけに賛同した友人たちが集まり、今年の1月からコンサート開催に向けての作業が始まりました。「私たちのほとんどが子育て中の主婦で、ノウハウもありませんでしたが、協力してくださる方も多くて、貴重なアドバイスももらいました。みんな子育ての合間を縫いながら、資金集めやビラ配り、チケット販売などに頑張ってくれました」といふように、チラシやチケットなどのデザインはスタッフ自ら作成するなど、主婦の皆さんそれぞれが得意の分野を生かして取り組みました。

「木下さんの歌から感動、喜び、勇気を感じてほしい」。その強い願いと努力とチームワークで臨んだ集大成が、本年9月6日に市民会館で開催した、木下航志ライブインさやまになりました。
「感動した、また聴きたい、スタッフの熱意を感じる、などの声を寄せていただき、本当にやってよかったと思います。また、多くの方の協力があったて成功したことに心から感謝したいです」と話す実行委員会の皆さん。なお、コンサートへの収益金は、市と社会福祉協議会に寄贈されました。
この経験を生かし、地域のためになる、元気の出るライブをもう一度できたらと意欲を燃やしています。



メインスタッフの皆さん。左から小谷野みほ子さん、菅原実千代さん、根本奈津子さん、平田恵美子さん

木下航志ライブインさやま実行委員会

オピニオン

新しい自分を発見するために



夏井千代子さん
(水野在住)

身体のために、日ごろから運動を心がけることはとても大切だと感じています。今年には運転免許証の書き換えの年でしたが、年齢からの不安で更新をしませんでした。そのため、それまで車で通っていた娘のところに、今では歩いて訪ねるよう

にしています。約7キロの道のりも、季節の移り変わりや風景を楽しむことで、1時間30分かかると感じる時間が短く感じられます。初めは、足腰に不安がありましたが、若いときに登山やソフトボールで身体を鍛えていたことが幸いしたのか、さほど苦にならずに続けられています。また、最近はスポーツジムにも通い、プールやバイクなど、いろいろな運動に挑戦しています。

まわりに気を使ってしまう性格のため、いつも一人で運動しているのですが、これからさらに年を重ねるにつれ、人とのふれあいや関わりが大切になってきます。そのきっかけになるような、一人でも気軽に参加できる事業や交流の場を設けていただけたらうれしく思います。そして、参加することで、新しい友人や、今までにない自分が見つけれれば、これからの人生をより豊かに過ごすことができると思います。

市の考え方

生きがいを持って生活するためには日ごろから、健康づくりや体力づくりに親しむことが大切です。老人福祉施設や体育施設などでは、年齢や体力にあった事業を開催していますので、ぜひご参加ください。市民の皆さんが、地域や家庭において生涯現役で充実した生活が送れることを願っています。

担当 高齢者支援課

皆さんの「声」をお待ちしています。
お寄せいただく際は、住所、氏名、電話番号をご記入ください。☎2954 6262(代)
✉koho@city.sayama.saitama.jp

問合せ土田文子さんへ
2958 0392
時間を忘れて没頭できるひとときを楽しみながら、これからも、個性的で深みのある作品を作り上げていきたいと思えます。

私の宝物 ...

長年の使用に耐えた大工道具

戦争も終わりを迎えようとしていた昭和20年4月、女学生だった私は、長野県の松本市に疎開し、それから約4か月間、勤労動員により木工所で燃料タンクを作る仕事に従事しました。そのときの経験が、今の私の生活に大変役に立っています。



杉山康子さん
(南入曽在住)



愛用のかなづち。長い間にわたって、活躍してくれています

長年使っている大工道具のかなづちの中の1本は、疎開のころから使っているもので、大工仕事が好きで、自分でできることは、何でも自分でしてきました。今ではこの大工道具が、愛着とともに、大事な宝物になりました。

今回は、青柳にお住まいの方をご紹介します。

Hello ハロー 仲間たち

Vol.340



技術の向上のため、有名な作者の作品展にも出かけます

ポーセリンペインティング

私たちは、平成6年に始まったポーセリンペインティングを楽しみながら、現在男女合わせて11名が、月2回水野公民館に集まり活動を続けています。

ポーセリンペインティングとは、陶器に絵や色を加え、何度か焼き上げながら仕上げしていくもので、有名なものでは、マイセンやセーブルロイヤルコペンハーゲンなどがあり、ご存じの方も多いと思います。

作品を仕上げる際に、最も難しいのは、800 に設定された窯で、何度も焼き上げていく過程で、自分がイメージしている絵柄の色彩を表現するところにあります。また、絵入れも人物を描くときの表情や影の付け方など、とても繊細な技術が求められます。それだけに、思いどおりの作品を作り上げたときはうれしく、感動もひとしおです。